

Newsletter

July 2007

<http://www.aack.or.jp>

目次

編集後記	18
会員動向	17
事務局報告	16
尾瀬・長蔵小屋 訪問 新井 浩	15
雲南・東蔵考察団道中記 (下) 田中昌二郎	10
崗日嘎布山群の山名と地図について 松本健夫	7
AACKの今・これから 上田 豊	1
AACK人物抄 浅井東一さん (一九〇四〜一九八二) 平井一正	2

AACKの今・これから

上田 豊

五月の総会で、木村会長の後を継ぐことになりました。決められてから自分の考えを述べるのは順序が逆ですが、初仕事としてAACKの今後への思いを書かせてもらいます。

古くは一九六五年のAACK時報での本多さんの「解散論」、翌年の時報での酒井さんの「解散すべきか」に始まり、その三〇年後、今から一一年前に発刊されたこのニュースレターでも、AACKの現状と将来はしばしば議論されてきました。とくに三号と五号では平井さん・酒井さんの編集によるアンケートと座談会、のち二二号(二〇〇一)からの北村さん編集で二年間つづいた特集では、集中的に扱われました。

十年前の七号でわたしは、京都を離れて研究してきたヒマラヤの氷河について書き、その縮小加速になぞらえて、組織としてのAACKの衰退と消失の流れは逆らえない、と書き加えました。実際、AACKは(解散というより)引退すべきではないかと、自分は退会しようかなどと考えていたのです。

流れのダイナミクスはさておき、

AACKの現在の姿を切りとってみましょう。

*会員数・約二七〇(うち年会費五千元を納める会員、約一九〇)。

*年間四号の『ニュースレター』を軸に、復活してきた『ヒマラヤ学誌』、またウェブサイトを、さらに関東では「雲南懇話会」で、会員相互そして周辺とが繋がっている。

*元「国際登山探検文献センター」は移管されたが、そんな世界を實踐してきた人たちも居る。

*遠征基金を特別会計で有し、海外登山・探検助成制度があり、日山協・山岳共済保険を利用できる。

*過去の海外登山の事後・交流等の対応母体としての役目があり、国内山岳界でも京大を代表する。

*現行の公益法人制度のもとで社団法人である。数年後に制度が改定されるが、財産管理の必要もあり、公益をうたわなくてもよい一般社団法人として存続をはかる。

さて、これまで議論されてきたAACKの今後については、創立当初の理念をできるだけ貫こうとする方向と、現状に沿って残された道を探る方向の間で分かれるようです。一九三一年の創立時の目的はヒマラヤの初登頂であり、その実行組織として二十数人で結成されました。そ

れから四分の三世紀を経て一桁多い人数の組織になれば、会の性格の変貌は必然でしょう。

一九六〇年に公益性を持った社団法人として設立された際の定款上の目的は、「学術的基礎にたつ健全な登山ならびに探検を振興し、山岳に関する研究を奨励普及し、あわせて会員相互の連絡研修をはかり、もって文化と学術の発展に寄与するとともに、自然尊重の精神を高めること」となっています。この文中で「学術、探検、研究」といった語句がAACK的なところでしょうか。

いまのAACKを構成する会員に共通するところは、これまでの京大のパイオニア的登山・探検の伝統を尊重し、共鳴していることだと思えます。そこにおぼえるロマンが求心的な基盤となった、文化的・精神的なゆるい血縁体のような集団がAACKであろうかと。これを外から見れば単色に映りますが、内では自省・批判も抱きながら、多様性を認めてきたのでは。

さて現在においてこのような組織は、寿命はともかく存在しているだけで、少なくとも、貴重な文化財の保存的な意味があると、わたしは考えるようになりました。会員に委ねられているのは、その上にどれだけのものを付加するのかわからないことでしょう。

そこで、前記した現在の活動に加え、さらに活性化する企画が生まれれば大いにうれしことだし、一方、サロンとしての楽しみ方もあるでしょう。このニュースレターは大切な絆です。ふるって投稿し、盛りたててください。他の組織としのぎを削る時代でもなく、

この会に居る方々それぞれの自然なスタンスで、より充実したおもしろい場になればと思います。こだわり・しがらみを抜ければ、さらに魅力ある舞台が広がっているのかもしれない。

以上のように考え、前例の無い京都圏外に住む定年退職者ながら（けど会員平均年齢より若い）、会長となりました。自ら旗標をかかげるつもりはありません。皆さんがロマンを感じ、自由に何かをやろうというとき、必要ならお役に立てるようにと願っています。そこからもし、京都らしい何かが見つければと思いつながら。

AACK人物抄

浅井東一さん（一九〇四〜一九八一）

平井一正

一、AACKとの出会い

AACKには有名な先輩が多いが、ここに紹介する浅井東一（以下敬称略）はそれほど有名ではないけれども、人間的にも非常にすばらしいスケールの大きい外科医である。今西錦司や西堀栄三郎とならんでぜひ知ってもらいたい人物である。

浅井は明治三十七年八月二五日、京都で生まれたが、父君浅井健吉さん（耳鼻科）が大坂で浅井病院を建てた関係で大阪で育った。先に紹介した宮崎武夫とは、高校を除いてすべ

ておなじ学歴である。大阪階行社小学校から天王寺中学、山口高校を経て、京大医学部に入学した。そして旅行部で今西錦司と知り合ったのが、彼の運命をわける。

「そもそも私がこの今西学校にいれてもらうてから、もうかれこれ五〇年になる。学んだことは片っぱしから忘れてしまったが、長い間に私の皮膚からしみこんだ、この伝心塾の毒氣の力は計り知れぬほどで、今日では私の放屁の臭いまで、この学校独自のものになってきた。」（文献一）

一九三四年の白頭山登山、三十七年の内蒙古探検など、AACKの創立とその後の活動はまさに今西と行をともしにするものであり、AACKの登山と探検の精神が骨の髄まで浸透し、それを医学の面でも継承している。

一九三一年の西堀リダで行われた富士山極地法登山にも参加しているし（このとき工薬が滑落した話は、酒戸弥二郎人物抄に書いた）、さらに一九四〇年四月には、将来の科学探検にそなえて、木原、宮崎、浅井、今西寿雄、中尾、周布などが、富士山で、大阪毎日の協力のもと無電ならびに空地連絡演習を行っている。無線電話はもちろん、飛行機、発煙筒、布板信号、反射鏡信号 などについて演習を行った。（文献四）

それからまもなく日本は第二次世界大戦に突入するのであるが、浅井の波乱万丈の人生も始まる。

浅井の他の山行き記録は不明である。しかし浅井は登山もさることながら、彼の真骨頂は、医者としての人類愛と医学におけるパイ

オニアワークにある。

二、結婚そして戦中戦後の混乱期

一九二八年（昭和三年）、京大医学部を卒業した浅井は、一九三〇年結婚し大津に住み、三一年長女、三二年次女、三四年三女、三六年長男誕生と幸福な家庭生活を送った。

職業も、父君の浅井病院を手伝う他、京大外科教室、耳鼻科、福井県日赤病院、大阪北市民病院と広く活躍していた。

専門の外科以外に、当時としては珍しい高所順応に興味をもち、多くの論文がある。文献五（一一）

不幸なことに四三年（昭和一八年）夫人シズオさんが三年の闘病の末、三六歳の若さで亡くなった。四人の子供をかかえて、浅井がどれだけ悲しみ、苦勞したか、想像に絶する。後年一九六〇年代、筆者平井は、ヒマラヤ遠征について、いろいろと浅井に相談にのって頂いたが、何となく寂しげな雰囲気になっていた。今回はじめてその理由が分かった。因みにそのとき浅井はスバル360という小さな自動車を持っていた。人一倍大柄な浅井が、よく小さい車に入るものと感心して見ていたことを思い出す。

四四年（昭和一九年）京大からの依頼でビルマ医科大学設立の教官として出向した。陸軍に属していたが、戦況によりランゲーン、モールメンなど転々と移動した。そのときの記述がある。

「正規の軍医でもない私が、マラリヤでふらふらしながらサイゴンに流れついた。それ

は、日本の敗戦後数日目であった。それから一年間旧帝国陸軍病院で戦傷日本兵の修理作業を命じられて、実に良く働いた。」（文献一）とある。

四六年帰国したが、残念なことに一年前の四五年五月に、父君健吉さんが七五歳で亡くなっていった。

帰国後しばらく大阪市衛生局で防疫関係の仕事をしていた後、五年には大阪で浪花病院を開設する。

防疫関係の仕事をしていたときの話を浅井は書いている。（文献二）

「敗戦後まもなく、米国の軍人がつれてきた犬から、大阪に狂犬病が突然出現した。この病気にかかった犬の脳の変化をみようと思った私は、この狂犬の首を切って、研究室に持ち帰るよう命令した。もう一つの官庁の衛生部の人も、お役目柄、この狂犬の脳を検査する必要を感じて、犬のところへ首級を取りに行った。勇み立って、彼らがいってみたら、首はすべてわれわれが切り取ったあとで、胴体だけが残っていた。電話がかかってきたり、使いの人が来たりして、コワ談判。それから毎日のように犬の首の取り合い交渉が続いた。

私はこちらで顕微鏡標本が完成するまで、とうとう犬の脳を相手に渡さなかった。」

浅井はクリスチャンであった（六三年のアフリカのときは、大阪の教会で「この男信者なり」の証明を出してもらった）。その関係で箕面でカソリック北原マリア病院の設立や七一年に釜が崎カトリック診療所設立を手

伝っている。

なおこの浪花病院は六八年に閉め、美原町平尾にリハビリ診療所を開いた（七七年まで）。釜が崎は貧困者の多いまちである。浅井は現金を払えなくて物納される患者さんも、分け隔てなく受け入れたり、退院を延ばし延ばしする働き口のない患者さんのために就職口まで世話されたときく。

三、アホーな医者―アフリカでの診療活動

一九六三年、浅井は今西錦司らと京都大学アフリカ学術調査隊の一員として、タンザニアに行った。報告書で浅井は書く（文献二）。

「現地で診療を始めようと、ただ漠然とした軽い気持ちでできたが、実際に歩いてみると、あまりにも貧困な惨状で、全くの驚きになってしまった。昔ビルマの医科大でウロ覚えをした熱帯病学の知識があるだけだが、アフリカの熱帯病はあまりにも大きすぎてどこから食いついていいかわからない。大はライオンや蛇にかまれた傷から、小はウイルスまで何でも知っていないと診断も治療もできない。」さらに続ける。

「元来学者先生仲間の諺に「何でも知ってゐるヤツはなんにも知らないヤツである」というのがあります。学識の間口の広いヤツを極度の軽蔑しているのです。私が考えるのに、臨床熱帯医学なんかをやっている人はまさにこの最も軽蔑すべき「八百屋医者」そのものずばりです。臨床熱帯病の医学大系の中に身を置いたためには、まず最初に世の専門学者諸先生から「八百屋」の烙印を押していたたく



写真1. エヤシ基地にて。浅井は一番左、正面が今西。



写真2. 浅井の若いとき。以上2枚は今西武奈太郎氏から。

覚悟からはじめなければなりません。でもタンザニアのサバンナの奥にも、タイの僻地にも熱帯性悪性疾患で明日の命も危ない病人が現在たくさん寝ています。この人たちの命を死からまもるには、研究室の奥深くに座っている大先生ではありません。どんな僻地へでも、自分自身の危険をいとわずに行く、アホーな医者だけです。」

浅井はアホーな医者に徹してタンザニアで診療を続けた。浅井のその報告には、底辺の人に対する愛情あふれる記述が多くみられる。その浅井に不幸の知らせがとどく。

「エヤシ基地で私を待っていたのは、次の電報でした。今西隊長は「浅井、気を落とすなよ」と前置きして手渡ししてくれた。

Your son Koh died by traffic accident

私は外科医者でありながら、わが児の意識をよびもどすため、一本の注射をすることも、血の吹きでる創に止血鉗子ひとつかけることも出来ませんでした。私の第一回アフリカ遍歴はこの日でおわります。

わが児「工」は小さいときに母を失って最近はこの父の私一人だけと一緒に暮らしていました。孤独だった彼のために一日も早く帰って、私なりの弔いがしてやりたかったです。外科医として彼のために何もしてやれなかったこの私を、他の一人でも多くの見知らぬ傷病者にささげようと心に誓いながら……」

実に胸がつまる描写である。

四、長男浅井工さんの事故死

長男工さんは天王寺高校から大阪市立大学工学部に進学、卒業して三洋電気に勤務していたが、一九六三年（昭和三八年）、単車を運転中に阪奈道路で対向車と衝突して死亡した。享年二六歳であった。そのとき浅井はアフリカにいて、葬儀にも参列できなかったことはすでに書いた。息子を亡くしたショックは大きく、浪速病院を閉めて、発展途上国の病人のために尽くしたいと決意されたのはこのときである。

工さんは大阪市大では山岳部に属していて、岩登りに熱中した。アンチヒマラヤで、第一次ランタンリルンにも彼の食指は動かなかった。しかし第二次ランタンリルンへの参加をきめ、その準備が忙しくなった中で起きた痛恨の事故であった。（大阪市大山岳副会長小笹孝さんによる）

なお余談だが、岩坪会員が大阪で自動車事故で耳を失う事故にあったときに、車で京都まで彼を搬送したのは、この浅井工さんである。

五、おれはやらにゃいけん

浅井の発展途上国の病人のための診療活動は、六六〜六七年に海外技術協力医療援助隊長としてタイに行ったときも続けられる。そのときの話を浅井は書いている。（文献二）

「人口二万ほどのスリサケという小さい町を根拠地としていた。そしてこれからいよいよ無医村地域診療に出發しようとしているとき、医療斑の若い日本人医師や看護師らか



写真3. 中列右から3人目が浅井、その前に西堀、今西。
(1979年祇園近江作にて)。



写真4. 大津本長寺にある浅井の墓（手前中央の円柱形）

ら嚴重な抗議が出て来た。「我々はそんな危険な場所でも働くためにタイまで来たのではない、大阪の公立病院の四倍の給料がとれるから来たのです」、「その村にはマラリアがたくさんあるとききました。隊長はわれわれが蚊にさされないと保証できますか、ため水を飲まなければならぬその村でアメーバ赤痢にかかるかもしれない、土地の人の病気を治しにいつて、こちらが熱帯性伝染病で倒れるのはご免です」「我々は自分の身の危険を犯してまでもタイ人の診療に従事したくない。どうか隊長おひとりで診療にお出かけ下さい」その翌日から私は一人で、この危険の満ちた村まで六〇kmの道を通い続けた。私は医者なのだから……。

「たとえ自分が感染の危険にさらされても、病気の現場へ乗りこんでいかなければ、医者の仕事はできない。また目前の死の恐怖におびえている病人とはどうしても直接に接触しないわけにはいかない。私のタンザニア僻地診療計画が四年前に中絶して以来、心の中でもややもやとした姿のままで残っていた「医者的一本道」が急に霧がはれてきたようにはつきりしてきた。タイまでやってきても、まだ銭勘定に憂身をやつしている日本の公立病院の看護師や医師から私は逆説的に教えていただいたのである。」浅井はこの報告を「おれはやらにゃあいけん」という文でしめくくっている。

六、それからの活動

タンザニアの後、一九六七年一〇月には、山下孝介教授を総隊長とする京都大学大サハラ学術探検隊の医学班隊員として探検を行った。この隊は隊員一九名におよぶ大規模なもので、梅棹、中尾、谷泰、石毛などが参加している。

一九七三年には東南アジア一か国、一八都市を「在留邦人の健康調査と相談」という目的で調査した。このとき、ビルマ、タイ、インド、ベトナム、フィリッピン、カンボジア、マレーシア、シンガポールなど多くの国を訪問した。この紀行を読むと、浅井の深い人間性、熱帯性感染症の危険をもとめせず、に原住民に対する深い愛情を、ひしひしと感じられる。

このほか、西堀や栗田など会員が東南アジアに行ったときに、思わぬ場所でも浅井と会ったと報告している。浅井は真に僻地医療に徹したのである。

七、晩年

話はすこし遡る。四人の子供を残して夫人に先立たれたあと、母上のすすめで一九四七年に再婚したが、まもなく離婚した。その母も一九四八年に亡くなった。一九五一年に再びある女医さんと結婚するが、別居結婚であり、男子を設けたが、浅井の死後一九七一年に籍を抜いている。（工塚が日本山岳会の「山岳」に、長男、次男ふたりを交通事故で亡くし……と書いているのは間違いである（文献三））

浅井は一九七三年〜七四年に農協関係の船で船医として外国をまわるなどしていたが、やがて大津で開業した。しかし体力が続かず、開店休業であった。そして一九八一年九月、脳内出血のために就寝中に死去した。享年七七歳であった。

八、おわりに

浅井は伊藤愿や谷博のように岳界に名を知られることもなく、弟子などを作ろうとはせず、ひとり医学の道、それも普通の医者が敬遠している熱帯伝染病の分野でひとり立ちむかっていた。誠実で、地味な仕事を熱心に遂行していた姿勢が、浅井の残した報告書に多く見られる。特に晩年は孤独の中で何回も外地に行き、多くの人を救った。そういう情熱は、彼が書いているように今西学校で学んだものであったというが、いかにその行動をひきおこすマゲマが、地下に貯えられていたかは、あまり人はしらない。それが地上に吹き出したのが、彼の晩年の行動であろう。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、国立民族学博物館梅棹忠夫先生、秘書の三原喜久子さんには資料収集でたいへんお世話になった。特に三原さんは多くの資料をコピーして送って下さった。これらの資料がなければ本稿は完成しなかつたであろう。また大阪市立大学山岳会藤本勇さんには同会副会長小笹孝さんへ紹介の労をとっていただき、小笹さんからは工さんや浅井家の菩提寺に関する貴重な情報を

いただいた。菩提寺は大津市の本長寺で、清水良随住職さんにもお世話になった。娘さんの浅井芳子さんは本長寺に近くにお住まいで、貴重な情報を提供していただいた。このほか今西武奈太郎、酒井敏明、栗田靖之各位などから資料の提供を受けた。以上の各位にお礼申し上げる。

参考文献

- 一、浅井東一…東南アジア在留日本人の健康、加藤、中尾、梅棹編：「探検・地理・民族誌」今西錦司古希記念論文集三、中央公論社、一九八三、pp.89-112
- 二、浅井東一…医学からみたアフリカ、今西、梅棹編 アフリカ社会の研究―京都大学アフリカ学術調査隊報告、西村書店、一九六八、pp.416-424
- 三、工榮英司…追悼浅井東一、「山岳」一九八一、pp.175-177
- 四、今西寿雄…富士山における無電ならびに空地連絡演習、京都探検地理学会年報、第二号、pp.7-20
- 五、浅井東一…探検医学、同上、第三号、pp.10-12
- 六、同…宗作遭難原因の再吟味 ケルン 五、一七号、1-10、一九二五
- 七、同…凍死論 ケルン、六、三五号、16-19a、一九二六
- 八、同…登高と馴致 ケルン、九、五〇号、6-18、一九二七
- 九、同…エベレスト遠征の生理学的問題報告（一）ケルン、一〇巻、五五号、

- 1-18、一九三七
- 一〇、同…同（二）ケルン、一〇巻、五六号、pp.5-12、一九三八
- 一一、同…高所順応、岳人、五号、pp.18-23、一九四七

付記

浅井東一略歴

- 一九二八年 京大医学部卒
- 一九四〇年 京大医学部外科教室
- 一九四三年 大阪市立北市民病院外科
- 一九四五? 浅井病院長
- 一九六三年 長男工氏交通事故で亡くなる
- 一九六五年からまもなく浅井病院をしめる
- 一九八一年 没

登山、海外調査など

- 一九三四年 白頭山（今西らと）
- 一九三八年 内蒙古（木原、今西らと）
- 一九四〇年 富士山で地对空連絡と訓練（木原らと）
- 一九六三年 京大アフリカ学術調査隊 タンザニアなど
- 一九六七年 海外技術協力事業団医療団团长 タイなど
- 一九六七年一〇月 京大サハラ学術調査隊 中尾、梅棹、谷らと
- 一九七〇年 インド（栗田が会う）
- 一九七三年 ビルマなど東南アジア一カ国歴訪

岡日嘎布山群の山名と地図について

松本徭夫

これまで私は二〇〇一年から二〇〇五年まで、毎年岡日嘎布（カンリガルボ）山群に訪れている。その間旧ソ連製二〇万分の一地形図をもとに、地元村人が呼称している山名の聞きとり調査を続けてきた。それも中国では、詳細な地図は国家機密であり不明な点が多かったからでもある。聞きとりにはそれなりに苦労した。例えば、こちらが聞いているピークが相手に認識されなかったり、複数の村人から異なる発音（聞こえ方）があったり、地方のチベット語発音（方言）があつたりなどである。山名は、チベット仏教と深い関係もあるので、意味も聞きとるよう務めた。

岡日嘎布山群内における聞きとりでは、新しく三六座（三七山名）（一座に二山名があるため）の山名をあきらかにすることができた。こうして新山名を記入した概念図を、次々と修正しながら発表してきた。

ところで本会のニュースレター四一号（二〇〇七年四月発行）に、東チベットに關係して数篇が掲載されている。そのなかで田中昌二郎氏は、私が最初に編図した図をもとに「拉古村を囲む山々」概念図を示している。私の最初の地図は、二〇〇一年、二〇〇二年までの調査結果をまとめて、二〇〇二年、二〇〇三年に発表（文献一）して

おり、田中氏はこれを参考に行っている。

田中氏も述べているように、松本はその後の調査で訂正すべき点をいくつか見いだした。それらを修正した地図は、二〇〇四年、二〇〇五年に発表（文献二）している。また本年上梓した単行本と山群山峰図にも示した（文献三）。これらの地図は、当初から旧ソ連製二〇万分の一地形図を元に、高度もこれに従っている。ただし、白日嘎（パイリーガ、ルオニ、チョムボ）の六八八二m、主稜⑧峰の六六〇六mは、中国察隅県と波密県に示された高度である。

近年、岡日嘎布山群は世界の登山家に知られるようになってきた。またAACKの多くの会員が本山群に訪れるようになったようである。今後この山群に訪れる岳人が増えるかもしれない。もとはと言えば私の二〇〇三年までの編図に原因はあるにしても、このような時に私の修正前の概念図が一人歩きされては心外であり、問題が残る。

そこで、ここに修正した地図二葉（日本山岳会福岡支部報一七号に発表した地図）を転載したい。地図作製にあたっての原図、高度などは既述した通りの旧ソ連製である。今後この修正地図を参考にさせていただきたい。

なお、修正した主要点は次の通りである。
一、ヒョン、シユビーナ、ザッドは、拉古氷河と阿扎氷河を境する稜線上の△印で一つずつ東に変移。高度はヒョンから順に四九二三m、五六九九m、五九〇三mである。

二、かつてのザッドは、主稜の無名峰（⑧峰、

六三九〇m）である。

三、松宗南方域のジガ東峰（五七八三m）はイダ。ジガ西峰（五六四三m）はりガに山名訂正。

四、パンチエンラモはパンテンラモ（四九三〇m）に山名と位置を訂正。

五、六三三〇m峰はパンチエンラモではなく、新山名のデルポラ（六二三〇m）に訂正。

六、その他新山名を付加

なお、田中氏（ニュースレター四一号）の写真説明について、気が付いた点を記しておく。

写真3 左よりシユビーナ（五六九九m）、ザッド（五九〇三m）、ゴンペマ（五三六七m）。

なおヒョンは写っていない。

写真4 奥中央は右からノイ（約六三〇〇m）、ゲムソング（六四五〇m）、六六〇六m峰。ただしクリーアでない見えにくい。

写真7 中央はシャナ（五五九三m）、右はヒョン（四九二三m）。

文献一（松本徭夫著）

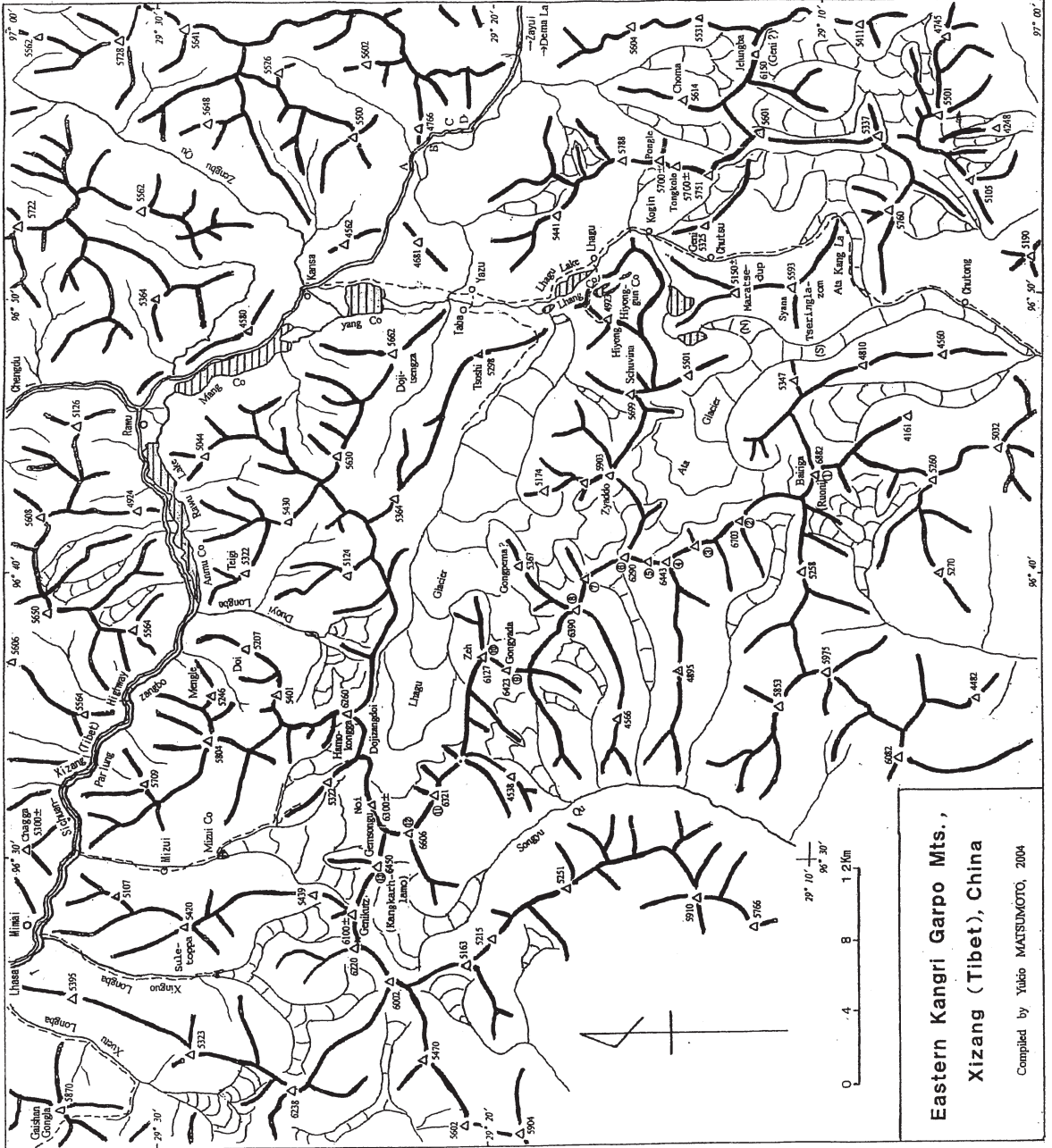
二〇〇二年「東チベット・カンリガルボ山群の地名など」日本山岳会福岡支部報一五号

二〇〇三年「カンリ・ガルボ山群」とくに山名など（二〇〇一年、二〇〇二年の踏査）「横断山脈研究会会報ユンシス（YUNXISI）五号

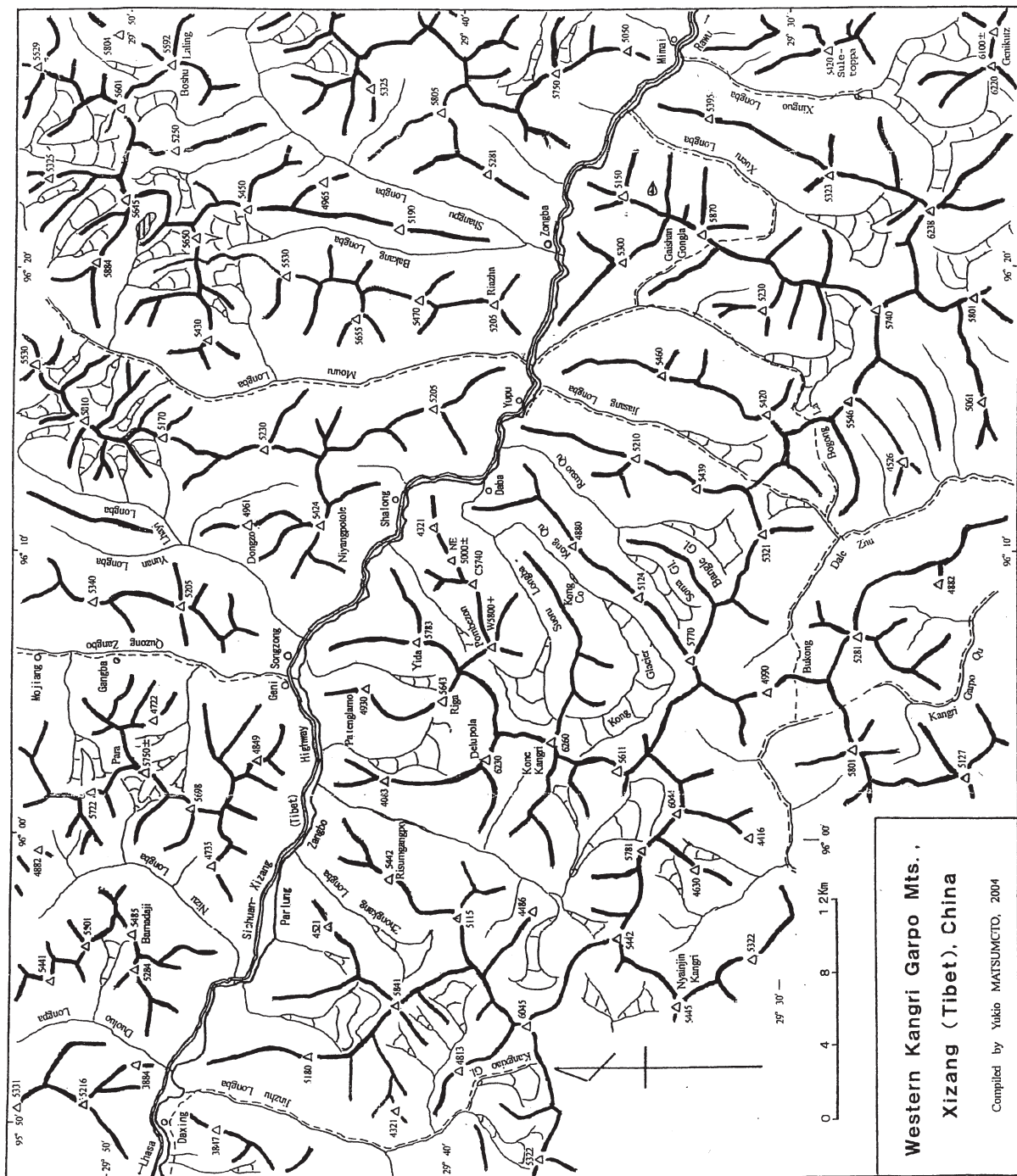
（なお同会で松本が講演したおりに、その時点での地図を出席者に配布している）

二〇〇三年「欧文地図二葉」日本山岳会 Japanese Alpine News 四巻

Eastern Kangri Garpo Mts., Xizang (Tibet), China



Western Kangri Garpo Mts., Xizang (Tibet), China



Western Kangri Garpo Mts.,
Xizang (Tibet), China

Compiled by Yukio MATSUMOTO, 2004

文献二

二〇〇四「東チベット・カンリガルポ山群の山名」とくに主稜の山峰群」日本山岳会福岡支部報一七号

二〇〇四「Survey and Exploration of Kangri Garpo East — Identification of Peaks and Unveiling of Hidden Valley」日本山岳会 Japanese Alpine News 五巻

二〇〇五「欧文地図二葉」日本山岳会福岡支部報一八号

二〇〇五「東チベット・カンリガルポ山群の山名」とくに主稜の山峰群」横断山脈研究会会報ユニシス (YunXiSi) 七号

二〇〇五「Exploring Kangri Garpo Range 2004 — Identification of Peaks and Unveiling of Hidden Valley」日本山岳会 Japanese Alpine News 六巻

文献三

松本徭夫編著 辻和毅・渡部秀樹著 二〇〇七

「ヒマラヤの東 崗日嘎布山群」踏査と探

検史」^{とつか} 権歌書房 八一八ページ

松本徭夫編図 二〇〇七「崗日嘎布山群山峰図(二葉)」権歌書房

雲南・東蔵考察団道中記(下)

田中昌二郎

一〇月一七日 小雨 いやいよ待望の波密



写真1. 波密(ポミ)の街のすぐ北の尖峰

(ポミ)の谷に入ると張り切るが、高い空は明るいのに、雲が低く垂れ込めている。有名な波密の刑務所「西藏波密監獄」の前を通る。傾多(Qington)から右の谷を詰めて傾多拉(五〇五六m)を越えれば、茶馬古道の故地、碩督(シュパンドウ)・洛隆(ロロン)と径はつながっている。今回は左の谷の奥、怪峰ジャロンI峰(六二九二m)など連峰の展望地への予定だったが、いかんせん雲厚く、玉仁(ユリ)郷手前のマニ塚にて(三九km地点)やむなく引返す。昼食後、古郷村の赤帽派出所につり橋を渡って参拝の後、通麦(タンメ 二〇二〇m)の西藏交通賓館に投宿する。

一〇月一八日 小雨 今日念願の易貢



写真2. 玉仁村手前のマニ塚

蔵布(イゴンツアンポー)に入る。午前八時三〇分、二車線の吊橋を渡り、谷入り口のゲートを通過、ゴルジュ地帯に入る。岩を削ってつけられた道路は車幅ぎりぎりです凸凹激しく、車は大波に揺られているようで大いに緊張する。しかし進む内に谷は直ぐに広がり安心するが、九時一〇分、崩落地帯に入る。土砂崩れの後が泥濘の湖になっている。皆下車し心配して見守る中を、陳さんを先頭に四台は、四駆を使わず二駆のまま難なく登坂通過してしまふ。運転技術抜群である。

そのうち兩岸はうっそうたる森林地帯、サルオガセが巻きついた高木の針葉樹林帯に変わる。森林の中の泥濘の道を、車の天井に頭をぶつけながら進むうち、大規模な地滑りの



写真3. 大規模な地滑りによって出来た易貢湖

説明標識に至る。二〇〇〇年四月九日二〇時に発生した大地滑りは全長5km、面積約八・六七平方kmに及び、易貢蔵布を完全に堰き止めて易貢湖が出来てしまったと図面入りで表わしてあった。その地滑りの為に栽培を放棄されたのか、背丈が二mほどに伸びた茶の木があらわれて驚かされた。

易貢村(二一四〇m)に正午頃到着。対岸の村への大吊橋も出来ている。ここには手入れされた茶畑があり、易貢の茶は特産品のようだ。対岸には鉄山という大岩壁が聳えている。秘境の村と思っていたが河岸の高みで中国電信が携帯電話のアンテナ工事をしていた。携帯電話網の発達は著しいものがあるが、これは単に民生用途だけでなく、治安面を考



写真4. セチ・ラからナムチャ・バルワ 7782 m を望む

慮してのことであろう。工事現場へ上り見学。広い村内を見渡す。民家の屋根も、雨が多いからだろうが、ほとんどトタン葺きになっていて違和感を持つ。上流を望むが雲が厚く、その切れ目にわずかに雪山が覗いているだけで、今日も眺望を期待できない、残念ながら通麦から二三十里の地点にて引返すことにする。

この易貢蔵布の上流のゴルジュ地帯を抜け八蓋卿を過ぎると、茶馬古道上の嘉黎や忠玉郷、阿蘭多(Arandu)に至る。車などない時代の村人は溪谷を廻り交易していただろうが、いまはその道も途絶えているようだ。またその先には、あのスパーマン西川一三が昌都へ行くべく冬の峠越えを試みて死ぬ思いをしたと書いた難所、Sharang-La(五〇三七



写真5. 八松措からジェシナラカブ 6316 m を望む

m)がある。この峠に川蔵北路と南路をつなぐべく道路建設が計画されていると聞くが、まだ出来ていないようだ。いい季節に古道を馬と徒歩で新辺覇へ越えたいものだ。

通麦に戻り昼食後道を急ぎ、今までたどった帕隆蔵布と易貢蔵布が排龍(パイロン)蔵布となつて、この先の大屈曲部でかのヤルツァンポーと合流するのかと思うと、ある種感慨が沸いてくる。

ギャラペリ北面の深い谷を進むが、俄然道路が広く路面もよくなりスピードが上がる。谷間から首を捻じ曲げて見上げると、垂直とも見える懸垂氷河をまとったギャラペリの前衛峰が忽然と現れた。六五〇〇m級とすると標高差二〇〇〇mほどもあるのか。しかしド



写真6. 有名な措頭（ツォゴ）村の背の高い幟

ライバーが気づかずにはぶつ飛ばしてしまい、写真が取れなかったのは残念だった。

雪の峰に囲まれた高原の村、魯朗（ルナン 三二九五m）に着いた。扎西岩（Zhaxingang）民族村と書かれた標識から望むと、白壁に緩やかな勾配の屋根を乗せた三階建ての民家の佇まいは、スイスの山村のような錯覚を覚える。魯朗賓館泊。名前は立派だが、便所の水槽が大破していて、便所の臭気が部屋にもこもっている。設備悪し。気温が低下してきた。

夕食は隣の石鍋屋へ行く。烏骨鶏、白菜、豆腐の鍋で、スープが美味。また白菜が特に美味い。高原地帯、寒冷地で甘みがでるのか？ 白菜のお代わりを三度も注文し、白酒がすすむ。店の戸は開けっ放しなので犬が入ってきて、人が捨てる骨を拾って食べようとテールブルの下に陣取って、追つても追つても足にまとわり付くには閉口した。

明日は待望のナムチャバルワを見られるだ

ろうか？

一〇月一九日 天気は良いが雲が上がつてくる前にと運転手の陳さんが道を急ぐ。色齊拉（セチ・ラ）手前のビューポイントに着くと、沸きあがる雲の上に鋭い四つの三角推の峰がそびえていて圧倒される。ナムチャバルワ主峰七七八二mのあの急峻で谷底から一気に頂上へ駆け上がる尾根を日本隊はよく登ったも

のだと感嘆の他ない。視線を左に転じるとギヤラペリ七二九四mだろうか、双耳峰が雲の間から真つ白な頂を覗かしていた。両峰を目の当たりにし至福の時を過ごしていると雲量を増して、しばらく見守るうちに頂を隠してしまう。思いを残しながらセチ・ラ（峠）四五一五mを越える。林芝（標高二九〇〇m）のはずれ結巴村に樹齡二〇〇〇年という柏の巨木、柏樹王を観覧。このあたりも豊かな森林地帯だったことをしのぶ。人民解放軍基地八一鎮にて加油（ガソリン補給）。レギュラーが五・三九元/L、ハイオクが五・六元/Lで、奥地なのに安い。軍基地のためか？ 東北出身とうたった餃子店で昼食、これも美味い。街はずれに名古屋の五〇m道路のような広い道路と街灯、その両側にシャッター戸の付いた同じ規格の新築家並みが忽然と現れる。オリンピック聖火リレーのテレビ中継用に準備しているのか？



写真7. ジェシナラカブの左にそびえるルンボガンゼガボ（6620 m）

この地方に多く残る石碉（戦闘用の物見台、烽火台、砦説などがある）を眺めながら道を急ぎ、チェックポイントで門票一人五〇元を徴収されて、午後三時四五分、五〇〇〇m〜六〇〇〇mを越える山々に囲まれた聖なる湖・八松措（パソソツオ）畔の「八松措旅游度假区」に着く。高度三四二〇m。高原の湖畔リゾートのしつらえではあるが、宿は日式、つまり日本式というが、災害地のプレハブ仮設住居を手に入れたのか、間仕切りに襖が入っており、浴室にはホクサンバスオイルが入っているもの。熱いお湯は出る。

荷を解いて後、湖畔を散策。今までの黄葉に紅色が加わり紅葉が美しい。湖の奥に三角錘のジェシナラカブ峰六三二六mが見える。

明日は八松措の南岸を車の入るところまで分け入る予定だ。どこまではいれるか心が躍る。夕食は大食堂で大いに盛り上がり、売店の白酒を買い込み部屋で二次会を開く人もあった。

一〇月二〇日 午前八時、車に分乗し湖の奥を目指す。結巴 (Yip) 村で舗装は切れる。同一規格のチベット風コテージを数多く建設中。観光地の民宿か食堂か土産物店になるのか。一昨年、類鳥齊 (ルウォチエ) ツクラカン門前でも、西部開発政策としての観光振興策なのだろうか、泥濘の参道両側にチベットログハウスを二〇軒あまり建築中であつたのとよく似ている。

ガイドの郭さんが林道のゲートの鍵を村長



写真 8. 八松措の北の怪峰

に掛け合い借り出してくる。一步入ると、悪路また悪路。またまた車の屋根に頭をぶつけながらの忍耐の旅となる。と、奥からバイクに乗った若者や年配者がどんどん出てくるのに驚く。その数二〇台を上回る。二人乗りも泥濘の道を巧みに乗り切つて行く。着飾つてゐる、お祝い事があるらしい。この道は車よりバイク向きだ。

正午前にやっと湖奥の村、措果に着く。地図には銭高と表記されているが、措 (湖) の頭、果てという意味なので、措頭または措果が妥当とガイドの郭さんは言う。

天気も快晴で銘々村内散策。採り入れの済んだ大麦畑の中の道をたどり、頭上にそびえる峻峰ジェシナラカブとその左の魁偉なルン



写真 9. 八松措の南の 5000 m 峰

ボガンゼガボ六六一〇mの姿に見とれる。しかし今日は絶好の雉撃ち日和、収穫の終わった大麦畑で六〇〇〇mの両峰を眺めながら至福の時を過ごしていたが、二〇mほど先に黒豚の家族六頭がこちらを伺つているのが気になる。やばい、落下物を狙うと聞いている。あわてて始末をして大急ぎで二歩離れると、一番大柄な雄を先頭に四頭が突進してきて、あつという間に跡形もなくきれいに掃除してしまつた。まだ瓜坊のような二頭は間に合わず、悲しげに空しく嗅ぎまわっていた。

サッカー場ほどの村の広場中央に、根元をしっかりと数mの石組みをして一五mあまりの白布の幟が立っている。中段と先端には黄、緑、赤、白、紺五色の横縞の布を巻き付けている。広場の周囲にも長短の白布の幟を一〇数本立てている。当然宗教的なものと思つていたが、帰国後、先人F・キングドン ウォードの「ツアンポー峡谷の謎一金子英雄記 (The Riddle of the Tsungpo Gorges, London) の中で、「ツォ・ゴ (湖の頭)」の大変背の高い旗幟として有名」と記しているのを読み、感慨一入であつた。

その後、村の民家の居間 (二階) を借りて昼食。木の床に囲炉裏が切つてあり赤々と火を炊いている。昔は椅子など使わず囲炉裏端に胡坐をかいて座つたそうだ。頭上にはヤクのチーズ、にんにく、ヤクの腎臓など保存食を吊り下げている。ジュースミキサーは置いてあつたが、昔ながらの筒に入れてバター茶を作ってくれる。乾燥した気候には丁度合つていて唇のひび割れ防止によく、且つ美味い。

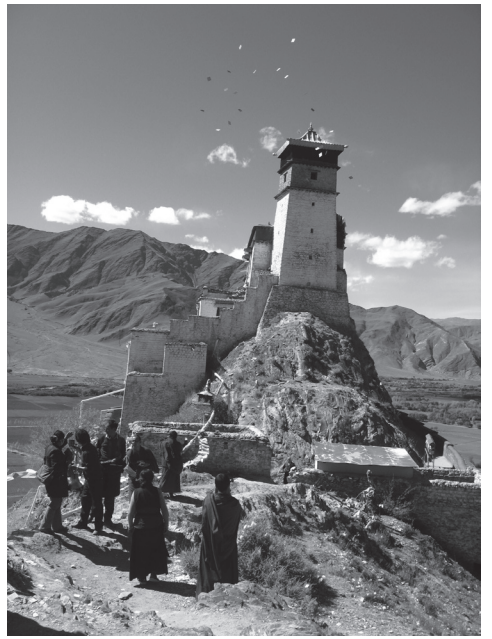


写真 10. 川南・沢当（ツェタン）の南の古城・雍布拉康（ユンブ・ラガン）

昼食後、ポカポカ陽気の放牧地を散歩する。収穫時の使役も終わりチベット馬がのんびりと草を食んでいる。我々も草に寝転んでジェシナラカブ、ルンボガンゼガボを飽かず眺めたり、居眠ったりゆったりと休息。郭さんからヤク、ゾ（大）、ゾンマ（小）を、尻尾の毛の生え方で見分けるのだと習う。と、バイクのエンジン音を響かせて二台のバイクが谷の奥へ走り去った。跨っていた若者は谷の奥の住人だろうか？ この谷の奥には六〇〇〇m（六八〇〇m）にいたる未踏峰がゴロゴロしている。医学班の石根さん、木村さんは現役ライダーだから、アプローチにバイクを使えば探査、登攀に機動力を発揮できると盛り上がった。ヤク一頭でバイク一台、高級車は二頭とか、そういえば昼食をした民家の一階にもヤクとバイクが同居していた。今や若者の必須アイテムとなっている。

一〇月二一日 浮橋をわたり湖に浮かぶ小島に鎮座するツォスム・ゴンパに参る。湖上遊覧船も数隻係留されていて、昨日訪ねた措果までつけてくれるそうだが、なかなか高くとるようだ。八松措に名残を惜しみつつ一路ラサへ向かう。「水电五局云々」の看板に大書し、この八松措の水を利用して大規模な水力発電所の建設中である。リーダー用のアンテナも林立しているし、

光線（光ファイバー）の工事中の表記も頻出する。奥地も開発のラッシュというところか。金達鎮の松多林政検査砦（四一〇〇m）にてトラックを止めて積荷の検査をしている。八松措の結巴村でも林道に鍵をかけていたのは材木の盗伐があるからだと言っていた。拉薩への最後の関門、米拉（メ・ラ、四八三〇m、公称五〇〇三m）を越える。ガスが立ち込めて強風が吹く低温の峠で、医学班持参のS社製「酸素水」を飲んでSP₂を計り、効力のテストがされた。早々に峠を下り、ひたすら舗装のよい公路を急いで、午後四時に拉薩大橋を渡り入城、馴染みの喜瑪拉雅飯店（ヒマラヤホテル）に荷を解いた。長途雲南から拉薩まで、全員何の不具合もなく到達出来たことは本当にめでたいことであつた。

一〇月二二日 拉薩観光（バルコル、大昭寺・

ジヨカン、色拉寺・セラ・ゴンパ）
一〇月二三日 ゴンカル空港―沢当（ツェタン）地区観光（雍布拉康・昌珠寺）
今日帰国する松井千秋さんと医学班の松林公蔵、奥宮清人、石根昌幸、木村秀生さんをゴンカル空港まで見送り、その足でヤルツァンポー沿いに下って沢当（ツェタン）へむかう（二台の車は雲南へ帰る）。
雍布拉康（ユンブ・ラガン）はチベット初代国王の宮殿を復元したもので、小高い岩山の上に立つ。参拝者が祈祷文を叫びながら空中に撒くルンタ（経文が印刷されて正方形の五色の紙）が、真っ青な空に吹き上げられて印象的であつた。
沢当西藏大酒店がリニューアル・オープンし設備も新しく食事付き大割引中で、連泊を決める。
一〇月二四日 対岸のチベット最初の僧院、桑耶寺（サムイェ・ゴンパ）へ。車が渡船場と反対の東へ向かうので不思議に思っていたが、ヤルツァンポーに橋が架かっている難なく対岸へ。このあたりは砂漠化が進んでいて、あちこちに小規模な砂丘が出来て道路を埋めている所もあつた。大本殿は年代を感じさせる荘厳なものだった。
帰途、河の遙か南方にぼんやりとはあるが急峻な独立峰が現れた。ブータン国境の六三九八mかと思つたが、ホテルの案内書によれば、沢当から南西約六八公里の雅拉香布雪山（ヤラシャンプ）六六三三五mとあつた。一度確かめたいと思う。
一〇月二五日 チベット初期の歴代の王墓、

蔵王墓を見学。谷間に方状の墓が一七基見つかっていて、そのうちの最大の墓所に参る。午後、拉薩に帰りヒマラヤホテルで休養。

一〇月二六日 青海湖に次いで大きな塩湖・納木措(ナムツォ)見物にと今日は北へ向かって出発。青蔵鉄道のゴルムド方面行きの列車が来る。撮影ポイントなのか速度を落としてくれて、しっかりと写真を撮る。これで列車の内、外からの写真が揃った。

夜来の降雪で当雄(タムシユン)の先標高四一三〇m地点で、残念ながら「大雪封山、禁止通行」となり、雪を被った念青丹拉峰七二六二mの連峰を眺めて引き返す。羊八井の川味(四川)食堂にて餃子で昼食。我々の三倍食べる中国人団体客の食欲に驚く。帰途、青蔵鉄道線路の側にて武装警察、公安、消防合同の爆発物除去訓練に会う。

一〇月二六日 午前、哲蚌寺(デブン・ゴンパ)。午後、ポタラ宮見学(笹谷と田中は休養)。一〇月二七日 ゴンカル空港―北京。空港でお世話になったガイドの郭さん、運転手の陳さん、ジェジェと分かれる。シャングリラからここまで、全走行距離は三一六五km。無事故で運んでくれたことに感謝の気持ちで一杯だ。ありがとうございます。彼等は雲南へ行く人を探して、ぶっ飛ばして帰るとか。三日位で帰るのだろうか？
一〇月二八日 北京空港―関空。全行程全員無事故終了、元気に家路についた。

追記 前No.41 雲南・東蔵考察団道中記(上)に記載したカンリガルボ山群の概念図

や山名同定に多数誤りがあり、会員各位と松本徳夫会員に大変ご迷惑をお掛けしたことをお詫び致します。(二)

尾瀬・長蔵小屋 訪問

新井 浩

六月一六―一七日に奥日光・学習院光徳小屋にて、年に一度のアンチョコ会(注)が開催された。チョゴリザ隊員の芳賀氏の肝いりであった。さらにアンナプルナ隊員の舟橋氏も学習院出身で元気な姿を見せていた。

このあと、私たち(高村・川崎・新井)は、尾瀬に回遊することを志し、紹介された長蔵小屋にむかった。「尾瀬―山小屋三代の記(岩波新書)」をその昔に読んでいて、尾瀬開拓の先駆者一族が苦難の道を歩んでいたこと、特に三代目が環境保護問題で苦闘し、三平峠で疲労遭難死したこと等、承知していたので、長蔵小屋一泊は、貴重な体験になるものと期待していた。

梅雨期なるも幸いなことに好天が続き、大清水から三平峠を越え、なんなく長蔵小屋に到着した。混雑のミズバショウシーズンが過ぎていたせいか、いたって静かな尾瀬沼であった。受付の平野太郎氏が私たちを笑顔で迎えてくれた。追々と話を交わし、太郎氏が四代目なること、亡くなった父上の三代目長靖氏が京大文学部卒であること、弟の桂介氏

も同じく京大文学部卒であること、ゴミ廃却問題事件の訴訟では、AACKの古瀬駿介弁護士や前田栄三副会長の応援を得たこと、等などが判明した。AACK会員なるがゆえに、後輩の活躍のお蔭で歓待されるとの榮譽をうけたわけである。

ここに、「御礼のメール」を掲載させて戴くことを許していただこう。

『平野太郎 様

帰宅後、後輩の前田栄三(S四四機卒)君に電話したところ、「桂介さんから電話連絡があり、皆さんたちの長蔵小屋訪問のこと、よく承知していましたよ」とのこと、驚かされました。また、恥ずかしそうに、尾瀬の自然保護問題や、訴訟問題に片棒を担がせて貰ったと語り、出合いがあり、関係が深まったことなどを伝えてくれ、理解いたしました。さらに弁護士の古瀬駿介(S四二法卒)君にも電話をし、訴訟事件はもう三年ばかり前のことで、詳細月日は忘れたが、岡弁護士(東大卒)とは、司法修習生時代の同期の関係から親しい関係にあり、手伝うことになったとのこと。いい判決が得られ、良かったと申していました。以後、毎年六月に長蔵小屋に出掛けているとのこと。

また、父上の長靖さんは、我々S三三年卒組とは一期下の学年で、京都大・同学会委員を務められていたことが判明し、当時の学生運動に共に熱を上げた仲間と判明し、一層の親しみを感じました。母上の紀子さまにもお目にかかることが出来、はからずも、「主人

事務局報告

が存命だったら、皆さんみたいなお顔・容姿に違いない」と笑って話されたことは、私の心に印象深く刻み込まれました。これを契機に一層の応援を申し上げたいと存じます。

お別れに際し、凶書を頂戴しましたこと、厚く御礼申し上げます。どうか母上さまによりしくお伝えください。次の機会には、戸倉ロッジをお尋ねしたいと念願しております。遅ればせながら、まずは御礼まで。』

なお、前田君によると、次男の桂介さんをAACK会員に推薦中とのことであった。こうなると、長蔵小屋・見晴の第二長蔵小屋・戸倉ロッジをAACK指定宿舎として、第二の笹ヶ峰ヒュッテともいうべき愛情を注がねばならぬと感じた次第です。どうか会員諸氏のご賛同をお願いし、客の少ない端境期に誘い合つて、訪問されるよう依頼申し上げます。なお、燧ヶ岳に登ったこと、ヤナギランの丘にある平野家のお墓にお詣りしたこと、小淵沢田代からの日光白根山（前日登頂済）を望見したことなど、ミズバショウが咲き残っていたことと併せて、一〇〇パーセントの満足度であったことを付記いたします。

(注) アンチョココ会とは、チョゴリザ隊は桑原武夫さんを中心に親睦会をやっていたが、その後アンナプルナ隊（今西寿雄隊長）が加わり、山の名前をくつつけて「アンチョココ会」と称したものである。その後のサルトリオ隊、ノシヤック隊、ヤルンカン隊などを包含し親睦を重ねている。

【理事会決議録】

日時 平成一九年五月二十七日（日）

午後一時～午後二時五〇分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館

一〇二号室

出席理事

木村雅昭 上田豊 福嶋義宏 田中昌二郎

横山宏太郎 松林公蔵 松沢哲郎 中川潔

永田龍 吹田啓一郎 竹田晋也 山田和人

委任状によるもの 以上一二名

前田栄三 牛田一成 人見五郎 高尾文雄

小林尚礼 以上五名

欠席理事 なし

出席監事 西山孝 伊藤宏範

以上二名

議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案

平成一八年度事業報告について

理事吹田啓一郎により平成一八年度事業報告が説明され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案

平成一八年度収支決算について

理事竹田晋也により平成一八年度収支決算が説明され、逐一審議の結果、満場一致で承認した。

第三号議案

役員の変更について

議長より任期満了に伴う本会役員の変更について、下記のとおり改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事 上田豊（会長） 前田栄三（副会長）

松林公蔵（副会長） 田中昌二郎 福嶋義宏

前田司 横山宏太郎 松沢哲郎 牛田一成

中川潔 永田龍 人見五郎 吹田啓一郎

山田和人 高尾文雄 竹田晋也 小林尚礼

以上一七名

監事 西山孝 伊藤宏範

以上二名

第四号議案

新入会員について

担当者より下記三名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

木村秀生、佐藤和秀、吉野和義

議長より「本日の社団法人京都大学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成一九年五月二十七日

【総会決議録】

日時 平成一八年五月二七日(日)

午後三時～午後四時三〇分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館

一〇二号室

正会員の総数 二五七名

出席者数 一七二名(うち委任状出席一三七名)

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事(会長)木村雅昭が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

第一号議案

平成一八年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成一八年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案

平成一九年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案

役員の改選について

議長より任期満了に伴う本会役員の改選に

ついて、下記のとおり改選候補者案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。

理事 上田豊(会長) 前田栄三(副会長)

松林公蔵(副会長) 田中昌二郎 福嶋義宏

前田司 横山宏太郎 松沢哲郎 牛田一成

中川潔 永田龍 人見五郎 吹田啓一郎

山田和人 高尾文雄 竹田晋也 小林尚礼

以上一七名

監事 西山孝 伊藤宏範

以上二名

第四号議案

新入会員について

平成一九年五月二七日開催の理事会において承認を得た下記三名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

木村秀生、佐藤和秀、吉野和義

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三〇分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

平成一九年五月二七日

事務局長 吹田啓一郎

会員動向

誤りについて、詳細且つ親切な訂正のご寄稿を頂きました。改めて厚く御礼申し上げます。平井一正会員にはAACK人物抄にいつも健筆を奮って頂き誠にありがとうございます。この号にて暫し休載とか伺っております。慣れ長らくの連載ありがとうございます。慣れない編集子にとってはニュースレターの柱として大変心強く感謝しておりました。また想を改め筆を起こして頂けるようお願いいたします。

二〇〇四年一月発行のNo.30から編集を担当してきましたが、このNo.42を最後に交代することとなりました。会員の皆様のご助力により、全く未経験のものが何とか役目を終えることが出来ましたことを改めて厚く御礼申し上げます。次号より前田司会員が担当となります。原稿締切は九月五日、発行は一〇月末の予定です。よろしくお願い致します。(田中昌二郎)

編集後記

松本徳夫会員から「崗日嘸布山群の山名と地図について」と題して、同氏の長年に亘る同地域探険調査から、前号「雲南・東蔵考察団道中記(上)」記載の山名及び写真同定の

編集委員

田中昌二郎

発行日 二〇〇七年七月末日

発行所 京都大学学芸会

千六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 氣付

京都市北区小山西花池町一―八

製作 (株)土倉事務所